

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：28003

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02413

研究課題名(和文) 琉球弧における島尾敏雄受容史の構築

研究課題名(英文) Construction of the history of Toshio Shimao's acceptance in the Ryukyu Arc

研究代表者

小嶋 洋輔 (Kojima, Yosuke)

名桜大学・国際学部・教授

研究者番号：50571618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：琉球弧における島尾敏雄という「場」を、多角的に考察し得る資料を収集することができた。特に島尾敏雄自身が記した日記資料の調査の意義は大きい。日記資料はどれも精緻な記録であった。なかでも、「沖縄」に滞在した際の日記の発見、調査を行なうことができた。この資料は、これまでの島尾敏雄研究においてほとんど触れられなかったものを明らかにするものである。また、それらを分類・整理できたことが、本研究が果たした重要な役割ということができる。しかし、研究期間内にそれを公開するまでには至らなかった。これらの資料を「文字起し」し出版することが、今後の課題である。また同時に、資料を分析する論の発表も必須である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、島尾敏雄と琉球弧の関係を具現化したことといえる。この具現化によって、「物語化」される恐れがあった琉球弧における島尾敏雄像の「現実」を見出すことができた。本研究が行なった、かごしま近代分館所蔵資料の収集と分類、整理作業によって島尾敏雄像の刷新を行なうことができた。そしてこの一人の作家像の刷新によって、戦後日本史のなかの戦後沖縄史の新たな視角を得ることもできた。本研究の社会的意義は、今後の課題とされる。4年の研究機関のほとんどを予想を超える数の資料の収集、分類作業にあててしまったため、その発表がまだとなっている。今秋には奄美大島での講演を予定しているなどアウトプットを進める。

研究成果の概要(英文)：I was able to collect data that could be used to examine the "field" of Toshio Shimao in the Ryukyu Arc from various angles. Especially, the survey of the diary written by Toshio SHIMAO himself is significant. All of the diary materials were detailed records. Among them, he was able to find diaries and conduct research during his stay at "Okinawa". This material clarifies what was hardly mentioned in previous studies of Toshio SHIMAO. It can also be said that this research played an important role in classifying and organizing them. But it didn't make it public during the study. It is a future task to "Transcription" and publish these materials.

研究分野：日本近代文学

キーワード：作家研究 地域研究 オーラルヒストリー 沖縄研究 日記研究

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1)本研究に関連する研究動向

島尾敏雄研究は、島尾の作品が、作家である島尾敏雄の「私」の問題を描くという特徴を有していたために、小説の素材の現実性にとらわれがちであった(鈴木直子(2004))。たとえば『死の棘』論でいえば、その時代性は無視し、島尾が体験した実際の問題が書かれた小説として、「私小説」「家族小説」として位置付けるものが多い。そうしたなかで花田俊典が残した功績は大きい。花田は「ヤポネシアのはじまり—島尾敏雄の「日本」地図」(1997)で、島尾という存在が60年代の沖縄をめぐる言説空間のなかで、どのような位置にあったかに着目、そのナショナリズムへの対抗姿勢を明示した。花田の島尾という存在を「私」の問題に収斂させるのではなく、広く戦後言説空間に開くという試みは、本研究事業に重要な示唆を与えてくれる。

#### (2)着想に至った経緯

本研究代表者は「文学から戦後史を構築すること」をその研究の主たる目的としてきた。そのなかで、作家である「私」の問題を小説に描く「第三の新人」の「私」の問題を探ることは、作家のパーソナルヒストリーを紡ぐ作業であると同時に、戦後文学史、戦後史の再構築につながるものであるという確信を得つつある。さらにいえば、その「私」が、虚構である小説などの文学作品に投影されるときに生じるズレを探ることからも、文学が担ったものの変遷及び、戦後空間における「私」の変遷に迫ることができる。そうした確信をもとに島尾敏雄という対象を眺めた場合、島尾という作家と作品の存在がその重要な因子であることに気づかされる。

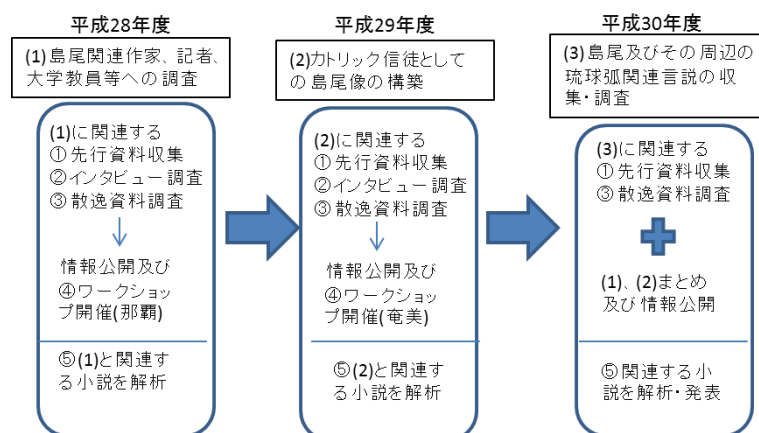
### 2. 研究の目的

本研究は、島尾敏雄が琉球弧においてどのように受け入れられたかを探るものである。

- (1) 島尾敏雄と関わった琉球弧の作家・記者・大学教員の言説分析および聞き取り調査。
- (2) 奄美大島におけるカトリック信徒としての島尾敏雄像の構築。
- (3) 島尾敏雄及びその周辺の琉球弧関連言説のまとめおよび収集。

を目的とする。島尾という作家が戦後琉球弧においてどのような役割を担ったかを、新資料を収集・分析することで解明するものである。本研究は単なる作家研究にとどまらず、「中央」の作家でありながら琉球弧にコミットした島尾という存在を見直すことで、新たな戦後琉球弧史の構築を目指すものとなる。

### 3. 研究の方法



※当初この方法を探っていたが、かごしま近代文学館所蔵資料の収集に時間がかかったこと、インタビュー対象者の高齢化などで、変更を余儀なくさせた。詳細は研究成果に記す。

### 4. 研究成果

#### (1)島尾敏雄と「沖縄」

島尾敏雄が琉球弧において、いかに受容されたかに関する「沖縄」の状況についての調査を行った。

#### ①かごしま近代文学館所蔵資料調査

島尾敏雄の資料が多く寄贈されているかごしま近代文学館での調査によって、明らかになったことを以下に箇条書きしておく。

- ・『日の移ろい』『続日の移ろい』草稿の収集・分析
- ・『日の移ろい』『続日の移ろい』連載時の実際の日記の収集・分析  
※『日の移ろい』『続日の移ろい』は日記形式の小説であり、この日記の存在は、本作がどのように虚構化されたかを探る興味深い資料である。
- ・奄美大島移住時（＝1955年～）の日記の収集・分析  
※2020年11月に予定されている奄美図書館での講演で成果を発表する予定。
- ・1963年、アメリカ合衆国国務省による招待旅行に関する日記ノートの収集・分析  
※この日記はこれまで未発見の資料であり、**今後公開**してゆきたい。
- ・島尾が奄美大島を離れる年（＝1975年）の日記の収集・分析
- ・沖縄滞在日記（奄美大島を離れて以降の日記も含む）の収集・分析  
※奄美大島在住時の沖縄旅行については、エッセイ等での言及があるのだが、1975年以降の沖縄滞在についての日記の存在は、これまで明らかになっていなかった新発見といえる。**今後公開**予定。
- ・神奈川県茅ヶ崎在住時代（1977～1985）、鹿児島県宇宿町在住時代（1985, 1986＝最晩年）の日記の収集・分析
- ・沖縄関連エッセイ（例：「安里川遡行」）の草稿の収集・分析
- ・沖縄関連知識人からの書簡の収集・分析

#### ②島尾と実際に「場」を気づいた知識人へのインタビュー

正式なインタビューは新川明氏に行なったもののみであるが、これも録音を断られてしまった。他、川満信一氏、高良勉氏に接触し様々な知見を得ることができた。平成29年度島尾敏雄生誕100年イベント（那覇市）に参加できたことも大きかった。逆に想定外であり、残念だったのが、対象者の高齢化である。特に奄美市での調査は困難な状況となっていた。

### (2)カトリックとしての島尾敏雄

#### ①かごしま近代文学館所蔵資料調査

上記日記資料に、ミサに足繁く通う島尾夫妻の姿は記録されており、教会に対するプライベートな思いも吐露されている。こうした言説の分析が急務である。また、島尾敏雄宛に送られたカトリック関係者からの書簡の収集も行なうことができた。分析を急ぎたい。

#### ②カトリック関係者へのインタビュー

前述した、インタビュー対象者の高齢化問題を受け、ほとんど実施することができなかった。また連絡を取れても、私的な内容であることを理由に断られることも多かった。

### (3)文化保存者としての島尾敏雄

想定外の発見としてあったのが、島尾敏雄の琉球弧の民俗、文化、また琉球語を保存しようとする意識の高さである。この成果を来春岩波書店から刊行予定の『琉球諸語と文化の未来』の一章として発表する予定である。

#### 引用文献

鈴木直子「研究動向 島尾敏雄」『昭和文学研究』（2004・3）

花田俊典「ヤポネシアのはじまりー島尾敏雄の「日本」地図」『日本文学』（1997・11）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小嶋洋輔	4. 巻 第23号
2. 論文標題 〔調査報告〕島尾敏雄と琉球弧 -  가고しま近代文学館所蔵資料から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名桜大学紀要	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小嶋洋輔	4. 巻 1号
2. 論文標題 戦後沖縄県の文学と「貧困」 - 「復帰」以降を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環太平洋地域文化研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 島尾敏雄と「沖縄県」 - 昭和50年代の沖縄滞在資料から
3. 学会等名 沖縄文化協会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 シンポジウム「道の島と伝承」パネリスト「島尾敏雄と昔話-島尾敏雄『東北と奄美の昔ばなし』から
3. 学会等名 奄美・沖縄民間文芸学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 〔パネル発表〕「第三の新人 - 小説の「私」とエッセイの「私」」、梅澤亜由美・大木志門・河野龍也・小林洋介・尾形大・小嶋洋輔（発表内容の年代順）「私小説」をどのように考えるか？ 私小説性 概念による再検討の試み」
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 「書き分ける」作家としての遠藤周作
3. 学会等名 遠藤周作文学館第35回文学講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 鳥尾敏雄の琉球弧とキリスト教 『日の移ろい』『続日の移ろい』から
3. 学会等名 日本キリスト教文学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小嶋洋輔
2. 発表標題 鳥尾敏雄を「研究」すること - 『日の移ろい』を読む -
3. 学会等名 平成28年度鹿児島県立奄美図書館生涯学習講座「あまみならでは学舎」（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 井原あや、梅澤亜由美、大木志門、大原祐治、尾形大、小澤純、河野龍也、小林洋介、佐伯一麦、青木淳悟、水村美苗	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 480
3. 書名 「私」から考える文学史(16章及びコラム担当)	

1. 著者名 名桜大学編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 沖縄タイムス社	5. 総ページ数 147
3. 書名 名桜大学やんばるブックレット『文学と場所』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考